

あ と が き

『聖泉論叢』19号をお届け致します。

日頃紀要委員会の運営と『聖泉論叢』の刊行にご協力をいただき心から御礼申し上げます。

昨年アメリカのマイケル・サンデル教授の『これからの「正義」の話し』が注目され哲学ブームを引き起こしました。自然環境の破壊、人間を無視する企業経営の在り方、政治腐敗、特に昨年の東日本大震災以来、原発の危険性を再認識して脱原発運動、TPP 反対運動などは、人々にとって「正しい」ことは何かを今までに深く考えるようにさせています。

A. スミスは『道徳感情論』（筑摩書房1973 P. 135）において、正義について、人間社会という建物の支柱であり、それがなくなれば、人間社会は一瞬にして崩壊してしまうだろうと述べています。したがって、人間社会は人々の正義感に支えられ、営まれているといえるでしょう。

また正義とは何かについて、文化により違った考えがあるでしょう。例えば、平和を守るためには、戦争を起こすことを正義と思う国と、平和を守るには根気よく対話することで解決すべきであると思う国がある。ひとつには、このように正義についての考え方の違いにより、戦争や内乱などの紛争が後をたたない世界がつづいています。それにしても、平和を愛することは、人類共通の精神であると思います。

若者に正義感を育成し、世界に通用するような価値観を持たせるのは、われわれ教育に携わる者において必須の使命ではないでしょうか。それを実現するため、我々は率先して模範を示さなければなりません。教育の場において、このことが少しでも実現できることによって、学生一人一人が真に「大いに学び」且つ「大いに成長する」ことができると考えます。

毎年、本紀要を刊行する度に私は、大学とは、教員とはという問いについて年々深く考えるようになってきました。一人一人の教員が全人類にとって役に立つ真の教育・真の研究に真摯に取り組んでいくことを祈らずにはられません。

『聖泉論叢』19号が、社会、地域、学生などにとって、よりよい未来を切り開いていくことの一助となれば幸いです。

最後に、皆様の今後の研究・教育活動の益々のご発展をお祈りするとともに、本紀要への一層のご支援を賜りたく宜しく申し上げます。

2012年3月3日 雛祭りの日に

聖泉大学 紀要委員長 李 艶